

## 秋まき小麦ほ場におけるコムギなまぐさ黒穂病を防ぐために 発生ほ場の管理と蔓延防止に向けた営農技術対策

平成28年7月22日  
北海道農政部

秋まき小麦のコムギなまぐさ黒穂病は、戦後はほとんどその発生が見られなかったが、平成18年に発生が確認されてから、平成28年現在5振興局内で発生が確認され、激発事例も認められているなど本病の発生地域は拡大傾向にあり、今後の発生動向に注意が必要である。

発病穂は黒く異臭がする。穂の中には厚膜胞子が充満しているため、収穫作業によって健全子実にも胞子が付着して異臭麦となり、品質を著しく低下させる。また、麦稈にも胞子が付着する。伝染経路は、種子伝染と土壌伝染とがあり、汚染種子や汚染土壌の移動によって拡大するとされる。



写真 乳熟後期頃のなまぐさ黒穂病発病穂

外観は健全と見分けにくい小花を切断すると内部に厚膜胞子が充満している。

### 1 発生ほ場の管理と蔓延防止のために

#### (1) 収穫前のほ場確認

発病が認められたほ場では、発病株の抜き取りを行い施設混入を防止する。抜き取った発病株は、必ず畑の外に持ち出して適切に処分（土壌埋設など）する。

なお、抜き取りを行ったほ場では、再度、ほ場観察を行い、発生のないことを確認の上で収穫する。抜き取りが不可能な場合は子実・麦稈はほ場外へ持ち出さず共済組合と協議の上(3)の廃耕の処理を行う。罹病株を含む麦稈や未熟堆肥の移動によっても拡散が危惧されることから注意する。

#### (2) 収穫にあつての注意事項

収穫にあたっては、コンバインオペレーターや運搬担当で収穫物の状況を観察し、なまぐさ黒穂病に感染した子実の有無を確認する。混入が疑われる場合は、別扱いとするなど乾燥調製施設で健全な小麦に混ざらないよう取り扱う。

### (3) 廃耕する場合の注意事項

成熟期前の水分のある状態で廃耕する場合は、茎葉をストローチョッパーやデスクモア等で細断し、30cm以上の反転耕起を行う。また、すき込みに使用したトラクタ、作業機械は使用后、良く洗浄する。

成熟期を迎え穂が乾燥した状態の場合は、胞子の飛散を避けるため、デスクモア、ローラなどにより小麦を倒し、プラウですき込む。ほ場周辺部だけに発生が見られる場合は、発生箇所のみを刈り払い機等で倒し、発生の見られない中心部分はストローチョッパーによる細断も可能である。

### (4) 作業機械等の洗浄の徹底

発生畑の収穫やすき込み作業などに使用した作業機械は、作業終了後よく洗浄する。

機械の洗浄は、ほ場内で行うことが理想的であるが、ほ場内で洗浄が困難な場合は、ほ場外での土等の落下などに注意し走行する。

### (5) 野良生え対策

発生ほ場では、小麦の野良生え対策を行う。野良生えが越冬し結実すると発生が更に拡大するので、すき込み後や収穫後、小麦の出芽状況を良く確認し、雑草対策を兼ねてロータリー耕を越冬前までに2回程度行う。また、越冬後も小麦の野良生え状況を確認し、残っている場合は速やかに耕起する。

### (6) 緑肥の栽培

小麦すき込み後又は収穫後に緑肥を栽培する場合は、野良生えが越冬しないよう10月中旬までに緑肥をすき込む。なお、緑肥をすき込む際は、緑肥の作付け前にすき込んだ小麦が表面に出るのを避けるため、反転せずにすき込む。

## 2 蔓延防止を防ぐための種作業

本病の感染時期は、は種時の土壌湿度が高く、地温15℃以下が本病の感染好適条件で、遅まきするほど発生する危険性が高くなることから、地域ごとのは種適期を守ることが重要である。土壌の物理性、化学性を改善し、生育初期の生育停滞がないようほ場づくりを行う。

#### (1) 適正輪作の実施

小麦の連作を避け、3年以上の輪作を行う。

#### (2) 排水対策の実施

明暗きよの整備、サブソイラ等を施工し、ほ場の透排水性を確保する。

#### (3) 種子消毒の実施

種子は採種ほ産種子を使用するとともに、種子消毒を確実にを行う。

#### (4) 適期は種

は種は適期に行う。天候不順な場合で適期には種が出来ない場合は、無理には種せず、ほ場条件の良い時期には種する。

#### (5) は種精度の確保

は種に当たっては、は種深度が均一となるようは種床を調整する。また、は種機のは種深度を確認し、深播きとならないようにする。